

## 大学生に対する球技Ⅱ（バレーボール）授業に関する一考察 — 主に授業前と授業後の比較から —

福井大学教育地域科学部 稲垣良介

本稿は、球技Ⅱ（バレーボール）授業に関する報告である。バレーボールで中核となる空間でのボール操作において基本的なスキルを身につけ（わかる・できる）、標準化されたルールのもとで行うバレーボール（の攻防）が楽しめるレベルに達すること、その上で学生自身が身体経験を通してバレーボールの特性を理解すること、発生や史的変遷等について理解し教材解釈を深めることがバレーボール観を確立することにつながるであろうと考えた。「バレーボールに対する意識」「技能要素」「作戦、歴史、ルールの理解」における授業前・授業後の変容から、授業は概ね意図した方向に向かった。自由記述の内容からは、学生が教材としてのバレーボールを各々に捉え、ルール変更のあり方やその根拠を自身のバレーボール観に照らして思考したことが伺えられた。

キーワード：大学生、バレーボール授業、ルール、バレーボール観

### 1. 目的

バレーボールは、学校体育における球技領域のうち「ネット型」教材の内容に位置づく代表的教材である。

しかし、教育現場からは、接球時間が極めて短く、ボール操作が困難であることからサーブだけで勝負が決まってしまうラリーが続かないという指導上の問題点<sup>1)</sup>が指摘される。

その為、以前から「ワンバウンドまで許容する」「サーブは下手投げで投入する」等のルール変更<sup>2) 3)</sup>を加えた実践がなされてきた経緯がある。

学習指導要領では、「役割に応じたボール操作」や「連携した動きによって空いた場所をめぐる攻防を展開すること」（中学校）が求められる<sup>4)</sup>。直近の改訂に伴い、学習指導要領解説（保健体育編）では、「空いた場所への攻撃を中心にラリーを続ける学習課題を追求しやすいようにプレイヤーの人数、コート広さ、用具、プレイ上の制限を工夫したゲームを取り入れ、ボールや用具の操作とボールを持たないときの動きに着目させ、取り組ませることが大切である。」<sup>5)</sup>と明記された。これを受け、技能習得の手間を省いて「バレーボールの特性」に触れることができるよう指導者の明確な教材解釈に基づいたキャッチバレーボール（ボールの保持を認める独自のルール）といった先駆的实践がなされている<sup>6)</sup>。

ところで、学生にバレーボール授業を指導する際どこまでのルール変更なら許容できるか聞くと、先述のような“しばしば見聞きする”答えが返ってくる。しかし、さらに返答に対する根拠を問うと、答えに窮したり、脆弱な内容になったりしてしまうのが現状である。その要因として、次の三点が挙げられるだろう。

一点目は、指導者としての視点がもてないことであ

る。これは、学生が上記問いに対して、学習者として絶対化された自己の経験に依拠するため、指導者が意図するルール変更のもつ相対的意味という視点にまで思考が及ばないことを指している。実践者から指導者、教師としての意識の変革がなされていないのである。似たようなことは、賀川の報告<sup>7)</sup>も指摘している。

二点目は、バレーボールの楽しさが分からないということである。これは、学生がこれまで受けたバレーボール授業の経験で、“サーブだけで得点が入ってしまうゲーム”のように、バレーボールのゲームとして満足できる水準に達することなく展開され、その結果何がバレーボールの楽しさなのか理解できないまま今に至っていることを指す。バレーボールの特性に身体経験を通し、実感を伴って触れられていないのであり、不可欠となる要素を支えるルールが何であるかが分からないのである。

三点目は、ルール変更そのものへの抵抗感である。中村は「スポーツのルールをプレイヤーの技能の水準、チーム編成の事情や競技場の条件等に合わせて変更するよりも、ルールにプレイヤーやチームの事情を合わせて自己を正当化しようとする権威主義的傾向が強い」<sup>8)</sup>と述べ、わが国のスポーツの行われ方の特徴として『公認ルールの神聖化』の弊害を指摘するが、学生もこれまでの経験で、少なからずこうした影響を受け、ルール変更そのものに多少の“嫌悪感”のようなものをもっており、したがって先ほどの問いへの返答やその根拠を示すのに窮するというものである。さらには、技能習得と戦術の深まりは本来相互補完の関係にあるとの立場から、バレーボールの特性に触れさせるためのルール変更による“安易な必要技能の低レベル化”に対する自責や葛藤が少なからず学生に立ちはだかるのであろう。

さて、「どのようなルール変更なら許容できるか」という問いに答えるには、学生自身が教材としてのバレーボールの特性をきちんと捉えること、指導者として目指すバレーボール授業を学習者の具体的な様相としてイメージできるレベルまで明確にすることが肝要であろう。言い換えれば、学生自身のバレーボール（授業）観が基盤として確立がされることである。そのための方途は様々であると思われる。佐分利はコマ数の少ない大学の授業（表現運動）について「プラスの『教材観』や『楽しさ』を実感させて、教材や指導法の研究は就職後にゆだねざるを得ない現状」<sup>9)</sup>を指摘するが本稿の対象とする授業は全16回である。筆者は、少なくともバレーボールで中核となる空間でのボール操作において基本的なスキルを身につけ（わかる・できる）、標準化されたルールのもとで行うバレーボール（の攻防）が楽しめるレベルに達すること、その上で学生自身が身体経験を通してバレーボールの特性を理解すること、史的変遷やルール等について理解し教材解釈を深めることが有益であると考える。これら経験が基底となることで、これまで単に“見聞きしたことのあるルール変更”の意味することを、実感を伴って語ることにつながるであろう。これは上述の三点目の見解に相違するものではない。なぜなら、既存のルール（またはそれに近い）下でのバレーボールの特性に実感を持って触れることで、指導者としての視点から必要な要素が自ずと判断できるからである。

本稿は、このような背景（問題意識）をもって行われた体育を専門とする学生に対する球技Ⅱ（バレーボール授業）受講学生の授業前から授業後における「バレーボールに対する意識」「技能要素」「作戦、歴史、ルールの理解」の変容、及びバレーボール観について先述の問いに対する授業後の記述をもとに考察した。

「バレーボールに対する意識」「技能要素」「作戦、歴史、ルールの理解」についてはアンケート調査法（5段階評定尺度）の手法を用いたため、変容の質的変化は捉えられない。この点を補うため、授業終了後の感想文から若干の解釈を試みるが、本稿の限界としてあらかじめ断っておく。

## 2. 方法

### (1) 対象者

2010年後期開設の球技Ⅱ（バレーボール）授業を受講した学生25名。学年（性別）は、4年生4名（男子2名、女子2名）、3年生7名（男子6名、女子1名）、2年生7名（男子4名、女子3名）、1年生7名（男子5名、女子2名）である。内1名は、海外からの特別聴講生であった。この1名には、補助者が付くことで回答可能と判断し、分析対象者とした。バレーボールを専門的に行なったことのある経験者は、25名中3名（12.0%）であり、高校までのいずれかの学齢において体育授業でバレーボールの経験を有する者は21名（84.0%）であった。

### (2) 授業の概要

授業は、平成22年度後期（平成22年10月7日～平成23年2月8日）に行われた。全16回の授業のうち、4回（第1、11、12、16回目）は教室で、他12回は第一体育館（コート2面使用）で実技を行った。指導は、バレーボール経験のある筆者が行った。チームは、6～7名で編成され、各1名リーダーが配置された。第2回授業で編成した後、第11回授業において一度のみ再編成した。編成にあたっては、男女学年混合、チーム間等質となるよう指示した。各学年代表1名、計4名が編成を行った。授業の概要は、表1に示す通りである。

### (3) 手続き

表2に示す項目（学生のバレーボールに対する意識を問う項目（2～5）、バレーボールの技能要素についての「できる」「分かる」「教えられる」を問う項目及び作戦、歴史、ルールの理解の知識に関する項目（6～26））を作成し調査（5段階評定尺度）を行った。得点が高いほど授業のねらいに一致する傾向を示す。調査は、第1回授業時（Pre）及び第16回最終授業時（Post）に質問紙を配布し集合調査法で行った。最終授業時（Post）のみバレーボールに対する意識を問う項目（2～5）について理由を記述させた。

また、各授業（第2～15回）終末約10分間で、授業で扱った内容について自由記述の感想文を書かせた。同一の内容を2回以上の授業で行った場合はその内容を扱った最後の授業に実施した。得られた資料は、各項目（バレーボールの技能要素及び作戦、歴史、ルール）の考察の際、援用した。さらに、最終授業時の調査（Post）の際、「あなたが中学校でバレーボールを指導する場合、守りたいバレーボールのルールあるいは変更したいルールを記しなさい。また、その理由を書きなさい。」とのテーマで自由記述させ、内容ごとに分類し考察した。25名中2名は分類不能（特別聴講生が未記入（1名）、テーマ無視（1名））であり、23名の記述が対象となった。

## 3. 結果と考察

### (1) バレーボールに対する意識

表3は、バレーボールに対する学生の意識について、第1回授業時（Pre）及び第16回最終授業時（Post）の結果をまとめたものである。

2.つまらない→面白い、3.不安→不安でないが0.1%水準、4.難しい→簡単が5%水準、5.楽しみでない→楽しみが1%水準の有意差を示した。いずれの項目も授業のねらいにそった変容が見られた。

「2.面白さ」の項目は、学生に標準化されたルールのもとに行われるバレーボールの楽しさが経験できたか問う項目であった。授業前、高い値（90.4%）を示したが、単元終了後はさらに値（99.2%）が上昇した。感想文

表1 授業の概要

日時	主な内容
第1回 10月7日	○実態調査及びオリエンテーション ・事前アンケート調査、授業の進め方について
第2回 10月12日	○試しのゲーム ・現在持っている力でのゲーム（25点1セット） ・チーム（チーム間等質）作り、課題把握
第3回 10月19日	○準備・準備運動の仕方 ・学習環境の整え方、ネット設営フロアの安全等 ・笛を用いたコーディネーショントレーニング ○オーバーハンドパスⅠ ・経験者による示範 ・ボールの落下点に素早く入る→投げ上げから潜り込み、額に当てる（前後左右） ・構えづくり イメージ→実践→課題掴み→要素分解→統合 ・うつ伏せからの対人パス、対人でのキャッチ、壁打ち、直上、直上歩行
第4回 10月25日	○オーバーハンドパスⅡ ・直上（高低差有り）、前後左右への移動 ・直上からの対人パス ・V字での対人パス（経験者を要に） ・円陣パス、円陣移動パス ・ロングパス ひざ、足先の向きを意識させる ・対フローターサーブ、対強打
第5回 11月2日	○オーバーハンドトス ・トリオでの右方向へのトス（右足への意識） ・レフトへのオープントス（チャンスボールのレシーブから）アンテナ付近への目標を設けて ・二段トス（レフト、ライト）ファーストレシーブを見極め、レフトまたはライト方向へのトス
第6回 11月9日	○アンダーハンドパスⅠ ・ボールの落下点に素早く入る→膝に当てる ・構えづくり 椅子を利用、対人で返球（乗せて運ぶ・移動のスピード変化、前・左右）、直上、直上歩行 ○サーブカットⅠ ボール正面で静止し直上
第7回 11月16日	○アンダーハンドレシーブⅡ ・強打レシーブ、ネット下からのレシーブ ・ペアでドライブをかけた強打をレシーブ ○サーブカットⅡ 膝の屈伸を意識したカット
第8回 11月30日	○スパイクⅠ（レフトオープンスパイク） ・スイング ・ヒットポイントでの ・ピンポン球捕球タオル振りでのスナップ ・棒を用いて両腕の協応 ・空中姿勢、台上からのスインガー着地 ・ステップ、フラフープを用いて三步助走によるスパイク 試合なし
第9回 12月7日	○スパイクⅡ（クイック） ・フォームづくりセンターからセミクイック（トスは投げ上げ） ・オープントスを最高到達点でキャッチ ・レフトオープントス（投げ上げ）をスパイク ・レフト平行 ・Aクイック
第10回 12月14日	○ブロック（スパイクⅢ 二段・平行トス、クイック） ・構え、コンビでのブロック ・レフトを中心に二段トスのスパイク ・ライトからのスパイクの助走の仕方 ・ブロッカーをつけてコンビでの攻撃練習
第11回 12月21日	○講義Ⅰ 歴史・作戦 ・マンアップ、ダウンフォーメーションの理解 ・ビデオ鑑賞（各ローテーションにおける作戦理解）
第12回 1月11日	○講義Ⅱ ルール・審判法理解、作戦（自チームのフォーメーションに応じて） ・配布資料によりルール・審判法の理解 ・自チームのフォーメーション、作戦 ・チーム練習の仕方
第13回 1月18日	○チーム練習 ・リーグ戦に向けて ・フォーメーションの確認、動きづくり、その他、チームごとに練習
第14回 1月25日	○トーナメント戦Ⅰ ・20点3セットマッチ ・審判（主審・副審・ラインズマン）有り
第15回 2月1日	○トーナメント戦Ⅱ ・優勝及び3位決定戦 ・20点3セットマッチ ・審判（主審・副審・ラインズマン）有り
第16回 2月8日	○まとめ ・課題レポート提出 ・事後評価表、授業感想（自由記述）記入

※各授業のはじめ10分程度、前時の復習を行った。

表2 質問項目

1. バレーボールの経験 「経験有り」の学齢に○						
授業→小学校・中学校・高校・大学		バレー部（クラブ）→小学校・中学校・高校・大学				
・あなたの考えに近いところに○		ポジション（				
		1	2	3	4	5
2. 「バレー」は面白いと思いますか？	つまらない	+	+	+	+	+
3. 「バレー」を教えるのは不安ですか？	不安だ	+	+	+	+	+
4. 「バレー」は難しいと思いますか？	難しい	+	+	+	+	+
5. 「バレー」を教えるのは楽しみですか？	楽しみでない	+	+	+	+	+
		+	+	+	+	+
6. オーバーハンドパスができる	できない	+	+	+	+	+
7. オーバーハンドパスのポイントが分かる	分からない	+	+	+	+	+
8. オーバーハンドパスを教えることができる	できない	+	+	+	+	+
		+	+	+	+	+
9. アンダーハンドパスができる	できない	+	+	+	+	+
10. アンダーハンドパスのポイントが分かる	分からない	+	+	+	+	+
11. アンダーハンドパスを教えることができる	できない	+	+	+	+	+
		+	+	+	+	+
12. トスを上げることができる	できない	+	+	+	+	+
13. トスのポイントが分かる	分からない	+	+	+	+	+
14. トスを教えることができる	できない	+	+	+	+	+
		+	+	+	+	+
15. アタックを打つことができる	できない	+	+	+	+	+
16. アタックのポイントが分かる	分からない	+	+	+	+	+
17. アタックを教えることができる	できない	+	+	+	+	+
		+	+	+	+	+
18. 作戦を立てられる	できない	+	+	+	+	+
19. 作戦を立てるポイントが分かる	分からない	+	+	+	+	+
20. 作戦を教えることができる	できない	+	+	+	+	+
		+	+	+	+	+
21. バレーの歴史が分かる	できない	+	+	+	+	+
22. バレーの歴史を教えることができる	できない	+	+	+	+	+
		+	+	+	+	+
23. バレーのルールが分かる	分からない	+	+	+	+	+
24. バレーのルールを教えることができる	できない	+	+	+	+	+
		+	+	+	+	+

※以下、各項目は、「「バレー」は面白いと思いますか？」→「面白さ」のように簡略化して記載。

表3 バレーボールに対する意識

項目	Pre		Post		t検定 (対応有り)
	M	SD	M	SD	
2.面白さ	4.52	0.26	4.96	0.04	3.77***
3.不安	2.56	0.84	3.64	0.57	5.42***
4.難しさ	2.16	0.81	2.68	1.06	2.12*
5.教える	3.48	0.68	4.04	0.54	2.91**

n=25 (\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001)

(Post) には「…最初から好きでしたがルールや作戦を習っていろいろなプレイができてさらに好きになりました。」「…特に思ったのが、戦術やフォーメーションを知ること、攻め方・守り方の幅が広がって面白くなった。また、その中で、みんなでボールをつないでいくことも面白かった。」「自分がアタックを打って点を決めることができなくても、サーブやレシーブに関わることに

より役に立っているという気持ちになるから。また、よいプレイや声かけがチームの流れを引き寄せ、最後まで分からない試合展開にとってもハラハラドキドキして楽しいから。」「(授業前→授業後の値が上昇した学生の引用である。以下、特に断りがない場合も同様。)等の記述が見られた。これらからは、プレイが出来るようになる“練習成果”やチームで精一杯運動する“意欲・関心”，チームごとの攻め方や守り方等を追求する“学び方”，チームで協力して教え合いながら学習をすすめる“協力”等の要素を経験することが、学生の好ましい変容に作用することが示唆された。一方、この項目の値が変化なし、あるいは低下した学生は13名であった。12名が授業前、授業後とも「5」と評価し、1名が授業前「5」→授業後「4」と評価した。そこで、「5」→「4」へ変容した学生についてその要因を探った。この学生は小・中・高等学校・大学でバレーボール部(小学校はクラブ)に所属し、中学校在籍時には某県代表選手(レギュラー)のセッターとし

てプレイした経験があった。（以下、単にセッター経験者）本授業ではチームのリーダーを努めた。感想文(Post)には「直接点を取ることが難しいセッターが大事であり、難しい所」と記述され、ここからは要因が見出せなかった。しかし、終末10分を利用して書かせた授業後の感想文に、この学生が既に会得しているスキルに他の学生が近づくためのポイントを記す特徴が見られた。以下、2例を挙げる。「タイミングをとれていない人が多かった。Aクイックは特に一瞬の遅れが命取りになるので第1歩目のタイミングが重要であると思った。…」(第9回)「みんな怖がっている印象が見えた。ブロックは相手を見てどこに打ってくるか判断して行わなければ効果的なものにならないので目を開けて相手をしっかり見る訓練が必要だと思った。」(第10回)つまり、この学生のレディネス(特にバレーボールのスキルに関する能力)のレベルが他の学生に比して高いにもかかわらず、学習のねらい(挑戦水準のレベル)が低く、したがって充足感を味わうことができなかったことが「面白さ」の値を低下させた一因であると考えられた。だとすれば授業の改善点として、①個々のスキルの能力に応じた課題設定をさせること、②能力別グループを編成しスキルの能力に応じた挑戦水準のレベルで練習させること、③チームでの練習時間をより充実させ、リーダーによる間接的指導を取り入れることが挙げられる。実際、この授業では、授業時間に対して学習内容が豊富であり、多くの練習方法を体験させたいとの授業者の意図が優先し、上記①～③の視点が脆弱であった。これは反省点である。

「3.不安」の項目は、中学生にバレーボールを教える際の不安の度合いを問う項目であった。授業前の値(51.2%)から、授業後は値(72.8%)が上昇した。つまり、数値上は教える際の不安感は低減された。授業では、教える際のポイントを示しながら学生に練習させることを一貫した。これは一定の効果があつた。しかし、不安は解消されたわけでない。以下、学生の感想文(Post)を示す。「まだ学び足りない所が多いと思うから。また、教えるときには教師の示範が重要だと思うが自分は示範と言えるようなアタック、トス、レシーブ、ブロックができるか不安だから。だが、大体のポイントは分かる。」「バレーの技術面でのポイントを知り、歴史や審判についても知ったので、子どもに聞かれた時にも自信を持って答えられると思いました。ただ、まだまだ知らないこと、未熟なところがあると思うので真ん中にしました。」「経験があまりないから細かいところをこれから勉強したいと思うから。」実際に教えたことのない(経験値が希薄な)学生からすれば、自分の知識の深まりや技能向上と教えることへの不安感の解消は必ずしも同一ではなく、教える際のポイントは一定程度理解したが、新たな課題が芽生え、過信すること無く学び続ける必要性を感じている。なお、この項目の値が変化なし、あるいは低下した学生は3名であった。2名が授業前、授業後とも「4」

と評価し、1名が「2」→「1」と評価した。「2」→「1」へ変容した学生の授業後の感想文(Post)を示す。「とても不安である。私の指導いかんによって、子どものバレーボールの上達レベルに差がつくのかと思ってしまっているからである。つまり、教える自信がない。自分でもあまりうまくできないことを子どもにどう教えればよいのか分からない。一つひとつの動きのポイントやコツは今回の講義で頭に入っているが、実際に教えるとなると言葉では言い表せない微妙な部分が出てくる。それを、(生徒の)前に出て実際にその動きをして教える自信が私にはまだない。」この学生は(学習者でなく)指導者、教師としての立場に立って思考しており、先の値が上昇した学生の「知識の深まりや技能向上と教えることへの不安感の解消は必ずしも同一ではない」という点で大差のない内容であった。むしろより誠実に自己評価しているとも考えられる。これは、好ましいと評価すべきだろう。

「4.難しい」の項目は、バレーボールをプレイするのは難しいか総合して問う項目であった。授業前の値(43.2%)から、授業後は値(53.6%)が上昇した。有意に上昇してはいるものの、授業後の値もほぼ中間に位置する。また、値のばらつきも大きい。感想文(Post)からは、授業前の漠然とした難しさが授業を通して明確な課題(具体的にはボールコントロール(延20名)や状況判断(延6名)に関する内容)となっていることが読み取れた。この項目の値が変化なし、あるいは低下した学生は8名であった。変化なしの4名は、「2」2名、「3」1名、「4」1名であった。低下した学生は4名であり、「3」→「1」2名、「2」→「1」1名、「3」→「2」1名であった。この内「3」→「1」、「2」→「1」へ変容した学生の感想文(Post)を示す。「どれだけ練習し、技能を習得できたと思って高いレベルを求めていくと、バレーは難しいと感じる。奥が深く難しい。」「同じボールは2度とこなくて毎回変化する。周りの状況も変化する。」これらからは、各技能要素に対してスパイラルに出現する欲求水準が高い学生や刻々変化する状況に応じたプレイにおける目指す技能レベルが高次である学生ほど評価が厳しくなることが推察できる。値のばらつきが他の項目に比して大きいことは、各学生の技能要素に対する欲求水準や刻々変化するゲームでの目指す技能レベルの相違による所が少なからず影響しているのだろう。授業では、既述のごとく「標準化されたルールのもとで行うバレーボール(の攻防)が楽しめるレベルに達すること」を一つの目標にした。しかし、この「楽しめるレベル」そのものが授業者、学習者である学生と共有されていなかった点は否めない。この点が改善されれば、一定のレベルにおいて「難しい」の判断をさせることが可能であった。

「5.教える」は、教えることが楽しみでない→楽しみについて問う項目であった。授業前の値(69.2%)から、授業後は値(80.8%)が上昇した。「バレーのルーツである『皆が参加できる球技』を生徒には学ばせたい。近

年攻撃的バレーで人を魅了することが多くなったがだれでも楽しめるスポーツ＝『バレー』を教えることがとても楽しみで期待している。」「ボールをつなぐバレーボール特有の醍醐味を実感させたい。」バレーボールの特性を学生なりに踏まえて記述したこれら感想文 (Post) は、値を上昇させた学生の典型である。一方、「ポイントが分かり自分自身が上達することができたが、実際指導する場合、生徒がどこでつまずき、それをどのように解決するのか少し不安がある。」「授業前よりだいぶ身につけているが実際教える以上示範がきちんとできるようになりたい。」等、教えることが楽しみではある (値は上昇したが) が、技能面の指導に対する不安が同居するといったところだろう。なお、この項目の値が変化なし、あるいは低下した学生は9名であった。変化なしの6名は、「3」3名、「4」2名、「5」1名であった。低下した学生は3名であり「5」→「3」1名、「5」→「2」1名、「4」→「3」1名であった。「5」→「3」、「4」→「3」へ低下した学生の感想文 (Post) を示す。「うまくできなくても、みんなが楽しくできるようなバレーの授業をしたいと思う。自分自身もうまくはできないが、とても楽しくプレイできたので、それを生徒にも伝えられたらと思う。」「今回の講義を受けて、子どもたちにバレーボールの楽しさを教えるのが楽しみである。子どもたちの上達も見たい。しかし、やはり教えるのに少し不安があるので完全に楽しみとは言えない。」はじめの学生は、やはり技能面の不安が値を低下させる一因であることを示唆し、後の学生は指導者としての責任感から値を低下させていると思われる。

## (2) オーバーハンドパス

表4は、オーバーハンドパスについて、第1回授業時 (Pre) 及び第16回最終授業時 (Post) の結果をまとめたものである。

表4 オーバーハンドパス

項目	Pre		Post		t検定 (対応有り)
	M	SD	M	SD	
6.できる	3.56	1.09	4.04	0.79	2.49*
7.分かる	3.16	1.06	4.16	0.39	5.77***
8.教える	2.64	1.16	3.72	0.63	5.01***

n=25 (\*p<.05 \*\*\*p<.001)

6.できない→できるが5%水準、7.分からない→分かる、8.できない→できるが0.1%水準の有意差が見られた。いずれの項目も授業のねらいにそった変容が見られた。

授業では、経験者の示範をさせた後、ボールの落下点に素早く正確に入るようさまざまな方法を用いて練習させた。また、うつ伏せで対人パスをさせ、手の形、脇の開きを掴ませ、壁へのパスや直上でのパスを行わせる等、

2時間かけ段階的に指導した。

こうした練習を経て、「6.できる」の値 (71.2%) は授業後の値 (80.8%) に上昇した。また、それぞれの練習の意味を実際の動きで確認しながら行わせたことで、「7.分かる」の値が授業前の値 (63.2%) から授業後の値 (83.2%) に上昇したと思われる。感想文 (第4回) には、「系統的に学べた」「一つひとつの動きのポイントが分かった」といった記述が見られた。よって、ポイントを明確に示しながらオーバーハンドパスの要素を部分ごとに反復連打させることは一定の効果があつた。「8.教える」の授業後の値 (74.4%) は授業前の値 (52.8%) より上昇しているが、「6.できる」「7.分かる」に比べ低値であつた。学生にしてみれば、自分のスキルを向上させることが優先課題であり、ポイントが分かり、できるようになってはきたが教えるにはまだ不安が残るといったところであろう。なお、「7.分かる」「8.教える」とも値が低下 (いずれも「5」→「4」) したのは同一の学生1名であった。意外にも「2.面白さ」の項目で抽出されたセッター経験者であつた。この学生の感想文 (第4回) を示す。「どんな所で生徒がつまずきを感じるか、それをどのように練習で克服するか、ゲームでいかにパスが重要であるかが分かった。」最後の「分かった」がポイントである。すなわち、技能レベルが高く学習者として (授業前) は「5」であつたが、授業を通して指導者としての視点が芽生えた結果が「4」と評価したことにつながったこと解釈した。

## (3) アンダーハンドパス

表5は、アンダーハンドパスについて、第1回授業時 (Pre) 及び第16回最終授業時 (Post) の結果をまとめたものである。

表5 アンダーハンドパス

項目	Pre		Post		t検定 (対応有り)
	M	SD	M	SD	
9.できる	3.68	0.73	4.16	0.56	3.36**
10.分かる	3.16	1.03	4.28	0.38	6.73***
11.教える	2.68	0.98	3.88	0.44	6.57***

n=25 (\*\*p<.01 \*\*\*p<.001)

6.できない→できるが1%水準、7.分からない→分かる、8.できない→できるが0.1%水準の有意差が見られた。いずれの項目も授業のねらいにそった変容が見られた。

授業では、6時間目にアンダーハンドパス、サーブレシーブ、7時間目に強打レシーブ、サーブレシーブを行った。サーブレシーブは、スキルの習得に時間を要すると判断し2時間扱った。特に、ボールの下に素早く入ること、腕の動きと膝の曲がり具合の協調が肝要であると意識させた。感想文 (第6, 7回) には、意識させたポイン

トに関する事項や「体の向き」「ボールに応じた使い分け」「腕の面を固定すること」に関する記述が見られた。ポイントを明確に示しながらアンダーハンドパス（レシーブ）の要素を部分ごとに反復連打の練習をさせることは一定の効果があった。

「9.できる」(73.6%→83.2%),「10.分かる」(63.2%→85.6%),「11.教える」(53.6%→77.6%)とも授業前の値より授業後の値が上昇した。しかし,「11.教える」の授業後の値は他に比べ低値であった。これは, オーバーハンドパスと同様の傾向であった。「9.できる」「10.分かる」「11.教える」の項目とも値の低下した学生はいなかった。3項目全てで変化なしの学生が1名であった。この学生の授業後(第7回)の感想文(箇条書きで記述された)を示す。「・上半身を上に向けてしまうとボールが後ろに行く。・下半身が棒立ちであるほどボールが流れていく。・上目づかいが難しい。・高いボールをどこで受ければいいのか分からない。」他の学生が,「できたこと」「分かったこと」を記述しているのに対して「上手くいかないこと」「分からないこと」を記しているのが特徴である。学生に対して求めるべき水準は示したが, オープンスキルであるがゆえこのような疑問が湧いてくるのであろう。指導した筆者に眼力があれば, 即時に助言・指導ができたことである。また, 質問を受ける時間や個人指導の時間が充実しているとは言えなかった。これは課題である。

#### (4) トス

表6は, トスについて, 第1回授業時(Pre)及び第16回最終授業時(Post)の結果をまとめたものである。

表6 トス

項目	Pre		Post		t検定 (対応有り)
	M	SD	M	SD	
12.できる	3.00	1.58	3.44	1.26	2.11*
13.分かる	2.64	0.91	3.64	0.66	6.12***
14.教える	2.28	1.29	3.24	1.02	4.91***

n=25 (\*p<0.05 \*\*\*p<.001)

6.できない→できるが5%水準, 7.分からない→分かる, 8.できない→できるが0.1%水準の有意差が見られた。いずれの項目も授業のねらいにそった変容が見られた。

授業では, トスを上げたい方向を向いて落下地点に入ること, その際, 返球に応じて右足での方向付けや左足を意識した静止姿勢が肝要であることを説明し, 練習させた。感想文(第5回)には「パスを受ける方向, トスを上げる方向に正体させることが正確さにつながると分かった。落下位置に入る最後の一步で安定性が増す気がした。」のようにポイントを意識して練習させた成果があらわれた。

授業後の値(「12.できる」(60.0%)「13.分かる」(72.8%)「14.教える」(64.8%))は, オーバーハンドパスに比べて低値であった。これは, トスを上げる機会が相対して少なかったことに起因する。本授業においては, バレーボールの攻防が楽しめるゲームが展開できるよう基本的にバレーボール経験者が継続してセッターの役割を担った。学生のトス(指導力)の向上を目指すのであれば, いずれかの時間にセッターの経験をさせる指導上の工夫があってもよいのであろう。なお, 値が低下した学生は「12.できる」「13.分かる」「14.教える」とも各1名(順に「4」→「3」, 「5」→「4」, 「2」→「1」)であった。感想文(第5回)の記述内容からは, 他の学生に比して顕著な特徴は見出せなかった。

#### (5) アタック

表7は, アタックについて, 第1回授業時(Pre)及び第16回最終授業時(Post)の結果をまとめたものである。

表7 アタック

項目	Pre		Post		t検定 (対応有り)
	M	SD	M	SD	
15.できる	3.24	1.19	3.84	0.56	3.46**
16.分かる	2.48	1.01	3.84	0.56	7.14***
17.教える	2.12	1.03	3.60	0.42	7.08***

n=25 (\*\*p<.01 \*\*\*p<.001)

6.できない→できるが1%水準, 7.分からない→分かる, 8.できない→できるが0.1%水準の有意差が見られた。いずれの項目も授業のねらいにそった変容が見られた。

授業では, フォーム作りからはじめクイック, コンビでの攻撃ができるよう3時間をかけ段階的に指導した。1時間目はスイング, ヒットポイント等フォーム定着に焦点を絞り, タオルや卓球球, フラフープ, 棒を用いて練習させた。2時間目は, 最高到達点でヒットすることに焦点を絞り, Aクイック, オープンスパイクを打たせた。3時間目は, ブロックを指導し, 様々なクイック, 平行, オープンでのコンビ攻撃をさせると共に, 二段トスをスパイクで返球する練習を行わせた。

感想文(第9回)には, 「クイックのほうがオープンアタックよりもボールに合わせやすかった。スパイクを教えるときにはクイックを用いるとよい。」のようにクイックでフォームやヒットポイントを意識した練習の利点が挙がった。また, 「トスが重要。繊細なブレイだと分かった。」「打つ人よりもトスのほうが大切だと思った。」のようにセッターのスキルがスパイクに影響すると感じ取った。また, これらはさらに「よいトスを上げるためにはよいレシーブが重要…」とつながる。動機付けの面からは, 単元の初期段階でスパイクを取り入れることも有効であろう。スパイクのポイントでは, 「タイ



ミング」「スイング」「ヒットポイント」等、授業で取り上げた内容に関する記述が見られた。なお、「15.できる」の項目で2名の値が低下（いずれも「5」→「4」）した。うち1名は、セッター経験者であり、感想文（第9回）の内容はオーバーハンドパスのそれと同様、指導者としての視点から記述されていた。もう1名は「何気なく打っていたアタックも腕振りやステップを改善することでうまく打てた。ボールをしっかりミートすることが難しくまだまだ課題が多い。」と記し、既習の事項から新たな課題を見出していることが分かる。「16.分かる」の項目で値が低下（「5」→「4」）したのはセッター経験者1名であった。値に変化が無かった（「2」→「2」）学生は1名であった。この学生は「腕を振り抜くことが大切だということが分かった。ステップを踏んで真上に飛んでタイミングを取ることが難しかった。」と記した。ポイントは分かったがそれが昇華できていないことに対し、評価を留めたのであろう。「17.教える」の値が低下した学生はいなかった。値に変化がない学生は2名（いずれも「3」→「3」）であった。この2名の感想文（第9回）の記述には教えることに関する記述は見られなかった。

## （6）作戦

表8は、作戦について、第1回授業時（Pre）及び第16回最終授業時（Post）の結果をまとめたものである。

表8 作戦

項目	Pre		Post		t検定 (対応有り)
	M	SD	M	SD	
18.できる	2.36	1.57	3.24	0.94	4.18***
19.分かる	2.04	1.12	3.32	0.81	7.60***
20.教える	1.88	1.03	3.12	0.94	6.39***

n=25 (\*\*p<.001)

6.できない→できる, 7.分からない→分かる, 8.できない→できるが0.1%水準の有意差が見られた。いずれの項目も授業のねらいにそった変容が見られた。

授業では、ローテーションのルールについて説明した後、ラインアップシートを多数配布し、マンアップ、マウンドウンフォーメーションの動きを各自に確認させた。また、中学生（女子）、社会人（男子）による公式試合をビデオで鑑賞させ、各ローテーションフェイズにおける作戦について説明した。「18.できる」（64.8%）、「19.分かる」（66.4%）、「20.教える」（62.4%）とも事前より値は上昇したが、他の項目と相対して低値である。感想文（第12回）には「対角線上に配置する基本的な仕組みが分かった。」「なるほど！と思うことが多くあった。」「セッターを中心に攻撃の形を考える。」「…それぞれの役割がよく分かった。」と記され、構造や隊形、役割の理解は進んでいる一方、「フォーメーション、作戦を考えるととても難しく教えるのはさらに難しそう。」「いろ

いろあって大変」等の戸惑いを伺わせる記述が見られた。作戦については、第11・12回目の授業で取り上げた内容である。早い段階で理解させ、実際の動きで確認する場面を設定することがより有効であろうと思われた。なお、「18.できる」「19.分かる」「20.教える」いずれの項目も値の低下した学生はいなかった。値に変化がなかった学生はそれぞれ2名（「2」）、3名（「2」2名、「4」1名）、1名（「2」）であった。感想文（第12回）からは、顕著な特徴は見出せなかった。

## （7）歴史・ルール

表9は、歴史・ルールについて、第1回授業時（Pre）及び第16回最終授業時（Post）の結果をまとめたものである。

表9 歴史・ルール

項目	Pre		Post I		t検定 (対応有り)
	M	SD	M	SD	
21.歴史分かる	1.68	0.89	3.52	0.59	8.32***
22.歴史教える	1.40	0.75	3.16	0.81	6.61***
23.ルール分かる	3.32	0.98	3.92	0.66	3.00**
24.ルール教える	2.72	1.29	3.72	0.54	4.47***

n=25 (\*\*p<.01 \*\*\*p<.001)

21.分からない→分かる, 22.できない→できる, 24.できない→できるが0.1%水準, 23.分からない→分かるが1%水準の有意差が見られた。いずれの項目も授業のねらいにそった変容が見られた。

「21.歴史分かる」（33.6%）、「22.歴史教える」（28.0%）とも事前（Pre）は低値である。第11時間目の前半を用い、起源と発展の経緯を筆者作成の資料に用いて説明した。感想文（第11回）には、「バレーが誰にでも楽しめるスポーツとしてつくられたことをはじめて知った。」「16人制や無制限等、以前のルールに驚いた。」「発祥の意図が分かった。ローテーションのルールの意味がはじめてわかった。」等の記述が見られた。これらの幾つかは中学校の副読本に紹介されるレベルであるが知らない学生がいるというのが現実であった。これは学生の責任というよりも中学校以降の「体育理論」の在り方が問われるものと思われた。また、このことを理解した上で授業を展開する必要があると思われた。なお、「21.歴史分かる」「22.歴史教える」の値が低下したのは同一学生1名（順に「5」→「4」, 「5」→「3」）であった。この学生は中学校でバレー部に所属しており一定の知識を持ち合わせていたと考えられる。感想文（第11回）には「歴史について驚いたことがいくつかあった。知らないことがあり驚いた。」と記したことから、既習の知識が不十分であったことを自覚し評価を低下させたと思われた。

「22.ルール分かる」（78.4%）「23.ルール教える」（74.4%）の値は、「歴史」に比して高い。授業では、審



判法（主審、副審、ラインズマン）と共に6人制バレーボール規則を解説した後、各チームで理解を深める時間をとった。さらに、不明な点について全体の前で発表させ、解説を加える時間を十分にとった。感想文（第12回）には「初めて知ったルールもたくさんあった。今まで守っていなかったルールもあり、気にしなければならなかった。」「主審、副審、ラインズマンの役割分担が分かったので一つひとつしっかり覚えておきたい。」「老若男女だれもができるスポーツであるためのスポーツであり、その為のルールができていたことが分かった。」等が記され、一定の理解が得られている。しかし、学生が実際に審判を行う機会は単元終末のリーグ戦に限られた。授業の早い段階から審判を行う機会を与えれば値はさらに上昇したと思われる。

### （8）自由記述から

第16時間目に行った調査（Post）の際、「あなたが中学校でバレーボールを指導する場合、守りたいバレーボールのルールあるいは変更したいルールを記しなさい。また、その理由を書きなさい。」とのテーマで学生に記述させた。記述例を挙げる。「バレーボールを行う際、”老若男女誰もが楽しめるスポーツ”というバレーボールの本質を忘れずに守っていききたい。理由は、この本質こそがこの競技の起源であるからである。だから、勝負にだけこだわりのではなく、みんなが楽しんでできるような授業をしたい。具体的には、ローテーションを守りたい。理由は、プレイへの参加機会が公平になって、バレーボールの楽しさをさらに得られるからである。」このような記述を、守りたいルール、変更したいルールに分類したのが表10である。守りたいルールにおける記述で最も多いのは、「ワンバウンドは認めない」である。その理由は、「緊張感のあるラリーが続く楽しさ。」「バレー独特の緊張感。」「相手コート面にボールを接触させることで点数を得るのはバレーの根幹。」等である。次いで「ローテーション」「キャッチボール」「フォアヒット」が挙げられた。それぞれの理由は、「ローテーション」では「プレイへの参加機会を公平にする。」「誰もが楽しめるゲームとしての大前提。」「キャッチボール」で

は「全員で何とかボールをつなげるところを大切にしたい。」「ラリーを続け相手との攻防を楽しむのがバレーボール。」「フォアヒット」では「3回という制限の中でどうやって相手に返すか、いかに点をとるのか考えさせたい。」であった。以下、「ダブルコンタクト」「集団対集団」「接球回数の制限」が挙げられ、「カバーし合いチームでボールをつなげるのがバレーボール。」「チームプレイであることははずせない条件。」「一人が何度も触れるのではなく、チームでボールをつなぐため。」等が理由とされた。

次に、変更したいルールについては「1本目のキャッチを許容」「キャッチバレー」「フォアヒットを変更」が最も多い3名である。その理由は、「1本目のキャッチを許容」では、「バレーボールの本質はラリーの繰り返しで攻防を楽しむことである。」「1本目のレシーブが安定すれば意図的な攻防が繰り返されられる。」「ラリーの要素が含まれており有効である。」「キャッチバレー」では「指導時間数を考えるとキャッチバレー。」「普通にレシーブしたりトスするよりも簡単で戦術を考えたり実践するのに有効な手段。」「フォアヒットを変更」では「ミスしても助け合うことができるのがバレーボールであり、3回でなく5回触球してもよい。」「全員でボールをつなぐことを楽しませたい。」「『レシーブ』『トス』『アタック』の三段攻撃の特質を捉えさせたいから。」であった。次いで「ワンバウンドの許容」「人数を増やす」「サービス方法の制限」が挙げられた。それぞれの理由は、以下、「ボールの動きについてこれられない生徒に対応できる。」「そこからセッターに返し、トス、アタックという流れを作る。ラリーを続けるため有効。」「クラス、チームの人数に関係なくラリーを楽しむことができる。」「6人では移動範囲が広い。」「サーブだけで点数が入ってしまうを防ぐため、アンダーサーブのみにする。」であった。

ここでの特徴は、例えば「ワンバウンドは認めない」「ワンバウンドの許容」の相反する項目において、いずれも「ラリー」という切り口から見た学生のバレーボール観が垣間見えることである。すなわち「ワンバウンドを認めない」派は、緊張感のあるラリーはボールを落とさないという前提にあると捉えこれを死守しようとし、「ワンバウンドの許容」派は、苦手な生徒も攻防（ラリー）に参加でき、三段攻撃を重視するといったバレーボール観が根底にある。このことは同様に「キャッチボール（捕球は認めない）」「フォアヒット」「フォアヒットを変更」の項目にも言えることである。つまり、学生が教材としてのバレーボールの特性を捉え、指導者としてどのようなバレーボール授業を目指すのかを明確にし、目指す授業での学習者の具体的な様相をイメージするという本授業での課題に迫ることが少なくともこの文面上において出来たことを示している。

表10 自由記述の分類（延人数）

守りたいルール	変更したいルール
・ワンバウンドは認めない（5人）	・1本目のキャッチを許容（3人）
・キャッチボール（捕球は認めない）（3人）	・キャッチバレー（3人）
・ローテーション（3人）	・フォアヒットを変更（3人）
・フォアヒット（3人）	・ワンバウンドの許容（2人）
・ダブルコンタクト（2人）	・人数を増やす（2人）
・集団対集団で行う（1人）	・サービス方法の制限（1人）
・接球回数の制限（1人）	

n=23

#### 4. まとめ

学生の反応（数値）を額面とおりに捉えるならば、「バレーボールに対する意識」「技能要素」「作戦、歴史、ルールの理解」において、授業は概ね意図した方向に向かった。つまり、本稿の前提となる「バレーボールで中核となる空間でのボール操作において基本的なスキルを身につけ（わかる・できる）、標準化されたルールのもとで行うバレーボール（の攻防）が楽しめるレベルに達すること、その上で学生自身が身体経験を通してバレーボールの特性を理解すること、発生や史の変遷等について理解し教材解釈を深めること」を一定程度満たした。

自由記述の内容（Post）からは、学生が教材としてのバレーボールを各々に捉え、ルール変更のあり方やその根拠を自身のバレーボール観に照らして思考したことが伺えられた。これは、授業でバレーボールの特性に触れた経験によって学生の判断材料が強化されたことに依拠しているものと思われる。したがって、筆者の問題意識としてはじめに述べた「これまで単に“見聞きしたことのあるルール変更”の意味することを、実感を伴って語ること」に対して、プラスの評価を与えたい。

授業の進め方についてはバレーボール経験者への配慮や構成の工夫等が浮かび上がった。

#### 5. 課題

学生個々の質的変容という面で不十分な考察となってしまう。補足するために用いた感想文は、授業後の評価が低下した学生のことを意図して引いたが、なお、都合の良いところを取り上げた指摘されればどうにもならない。授業後（Post）の自由記述からバレーボール観に言及しようとしたが、筆者の見聞が出发点となっており、事前に十分な資料が得られていない。バレーボール観が

どのように変容したのかを比較可能な授業前の資料を得るべきであった。これらは本報告の方法論上の限界であると言わざるを得ない。

今後は、質的な変容を捉えるために特定の個人を追跡的に検証すること、学生が教えることに対してより意識した授業ができないものか検討することを課題とした。

#### 参考・引用文献

- (1) 田村敏男（2003）「みんなが伸びるバレーボールの授業」『体育科教育』大修館書店、p50
- (2) 図解中学体育（2005）暁教育図書、p158
- (3) ステップアップ中学体育（2009）、大修館書店、p172
- (4) 中学校学習指導要領（2008）文部科学省、p91
- (5) 中学校学習指導要領解説保健体育編（2008）文部科学省、p85
- (6) 澤崎弘英（2010）「心をつなぐキャッチバレー学習指導展開案」平成22年10月28日福井大学教育地域科学部附属中学校授業研究会資料
- (7) 賀川昌明（2005）「運動実践者から運動指導者への意識変革を促す教科専門科目授業の試みー心理学、運動方法実習Ⅴ（バレーボール）の授業を通してー」体育科教育学研究21（1）、pp43-48
- (8) 中村敏雄（1995）「スポーツルール学への序章」大修館書店、pp47-48
- (9) 佐分利育代（2005）「小学校の体育を指導できる力の向上を目指した初等体育における授業内容（表現運動）ー教員養成課程における現状ー」体育科教育学研究21（1）、pp35-36

A study on class of ball game II（volleyball）to university student：comparison of pre and post Class

Ryosuke INAGAKI

Key words：University student, Volleyball class, Change in rule, Principle of volleyball education